

平成27年度 第1回 槻の木高等学校 学校協議会 記録

本年度第1回学校協議会は、7月18日に予定されていたが、委員の定足数が満たない状態となったため8月29日に順延され開催された。

なお、委員から互選で木村勝委員が会長に選出された。

<開催日時>平成27年8月29日(土) 16:00~18:00

<開催場所>大阪府立槻の木高等学校 応接室

<出席者>

[委員] 木村 勝 会長、浅野良一 委員、柿原勝彦 委員、
北山茂治 委員、芝井敬司 委員、

[学校] 竹下健治 校長、奥谷彰男 教頭、小梶芳忠 事務長
山本 尚 首席・学校運営室長、田中 眞 首席・生活指導室長
奥本雅俊 学習指導室長、藤田 稔教諭・学年室長

<話題提供>

- ①アドミッションポリシーについて (竹下校長)
- ②平成28年度教科書採択 (竹下校長)
- ③本年度の入試結果について (山本首席)
- ④新入生(13期生)の実態について
ア) 意識実態等 (藤田教諭)
イ) 学力実態等 (奥本指導教諭)
- ⑤学校保健委員会からの報告 (田中眞首席)

<協議概要>

北山委員

中学校側はアドミッションポリシーも参考にして志望校を決めるように、進路の担当教員が話しをしている。志望校を考えるうえでのきっかけになっていくと思われる。

芝井委員

数校のアドミッションポリシーを拝見したが槻の木のアドミッションポリシーは大変特徴的である。他校はボヤーっとしており全体として分かりにくいのでは?特色をつかみにくいものが多い。その中でも槻の木のものは分かりやすい。

浅野委員

自分の学校の等身大の姿を表現することは難しいことだと思う。中学校はどのように分析しているのか?

北山委員

さほど生徒は考えていないかもしれないが、アドミッションポリシーを含め、オープンスクールや学校説明会を参考にして進路選択をするように指導している。

木村会長

槻の木のアドミッションポリシーに書いてあることには虚偽がない。

浅野委員

気になるのは4番目のアドミッションポリシー。1～3番目は古典的なビジネスモデルであり、新しいビジネスモデルである課題解決型能力の構築のためには4番目をどうするか。転換が難しい。

柿原委員

このアドミッションポリシーを読むだけで素晴らしい学校と言うのが分かる。あとはICT機器を積極的に取り入れ、また国際交流もやっていくなどの遊び心も入れてあげればいいのではないかな。

竹下校長

このアドミッションポリシーは等身大であり、理想を書くところではないと思う。ただ責任を持って次の課題にも取り組んでいかなければならないとも考えている。

<話題提供2 平成28年度教科書採択について（竹下校長）>

毎年この協議会において教科書採択を決定するということであるが、第1回学校協議会が流れたため、事後の報告になり申し訳ありません。一覧表の通りとなっておりますのでご覧ください。

<話題提供3 本年度入試結果について（山本首席）>

生徒たちの状況から

木村会長

学校の先生がそういうところまで指導してくれているのはすごいと感じる。会社を経営していく中でいろいろな人と話をするが、悪いのは大人である。ゲームの問題など、本音と建前がたくさんあり、子供は賢いからずるい大人が分かっている。家庭単位、親が襟元を正していかなければいけない。社員を指導する際「どういう人間になりたいか」ということをよく聞く。出世などの上辺だけを見て、根本的な幸せのための軸を持っていない。子供に対して家庭単位で親が教育を行うべきである。槻の木高校は親がやるべき指導を学校がやってくれている学校だから素晴らしい。結果的には「人の役に立つことが目標」であるはずなのに損得だけで動いてしまう。我が会社においても海外のからの社員を雇用しているが、妻子を母国に残して仕事をしている社員は日本人に比べてモチベーションが比べ物にならないくらい高いと感じている。

親や教員が「あーせー。こーせー」でなく手本を見せて欲しい。子供より大人をどう教育・研修していくかが必要である。目の前の流行廃りに流せれることなく、具体的な発信方法が必要である。

浅野委員

18歳からの選挙権の指導はどうするのか？

芝井委員

大学の授業では「選挙に行きなさい」という指導する。普通選挙権と言うのは血が流されて得た権利であるから尊敬と共感の念を持ち必ず選挙に行きなさいという指導をする。たとえ投票が失敗してもそこから学べばよい。与えられた権利は行使しなければな

らない。世界的には 18 歳の選挙権は標準であり指導することを恐れる必要はない。あとはどこを見れば論点が書いてあるかを示す程度。

竹下校長

選挙権を持つことは公職選挙法の違反に係ってくることでもあるので、しっかりと指導していく必要がある。

芝井委員

アクティブラーニングは単純にいうと、受験勉強と生活経験に差が大きくなりすぎているということ。自分の生きている近いところで能力を発揮して欲しいというのがアクティブラーニングである。知識を有機的に関連付けると言うことである。現在の大学の生徒を見ても自分の意見を持ち、議論していく力が不足しているように感じる。知識の注入も必要であるが、よく物事を知っているのに前に立つと何も言えないような生徒が増えている。単純な知識の注入だけしか行っていなければ、生活経験が薄いと感ずる子供になってしまっている。面と人と向かい合って話ができない子供が大変増えてきている。アクティブラーニングでは個別の知識を総合的な理解を付けることにより、社会人になった時に生きる力になっていくと考えている。きちんとした志を持っていれば大きな人間になってくれると思う。

<話題提供4 13期生の意識実態について（藤田教諭）>

- ・転勤してきて5年目になるが、ピュアな楓の木生が増えてきた。圧倒的多数が本校の魅力を感じて入学してきていると感じる。

- ・与えられたものをきちんとこなすのは得意。課題発見応力をいかに付けていくかが課題である。きちんとした子が多い。

- ・中学時に「中で居場所がなかった」「いじめられていた」「人間関係で苦しんだ」と言う生徒が本校の雰囲気を見てどうしても本校に来たいと学力を伸ばして合格してくる。そういう子供たちを受け入れられる集団である。

- ・入学段階で大丈夫かと思うような生徒がしっかりやっていっている。満足度は高いのでは。なかなかこういう集団の高校はないと思う。「来てよかったね」と言ってあげられる学校。

- ・リーダーが育ちにくい。一步前に進む勇気を持つのが難しい。指導されるのを待つ子が多い。

浅野委員

そういう子を受け入れることができるのは、どこに原因があるのか？

藤田教諭

問題を抱えた生徒が、お互いに住み良い雰囲気を作っているように感じている。

芝井委員

それは1年生の夏休み前に限ったことなのか？

藤田教諭

私の知っている9期生からそういう雰囲気である。

木村会長

楓の木の子は自己主張が弱いように感じている。したがって社会に出た時には自分

の意見が他人に言えるアウトプットする能力を増やして欲しい。話をするのに慣れ、学習指導的に継続的指導を行ってほしい。

浅野委員

生徒会活動はどうか？

山本首席

他校でも同じような感じであると聞いている。擦れた部分やずるさを教えるのは簡単であるが、榎の木の良い部分を大切にしながらさまざまな能力を付けてやることも出来るはずである。それが教育の腕の見せ所である。

北山委員

中学校で榎の木に行きたいという生徒は真面目に勉強を頑張りたいと思っている。高校だけの話ではなく小中学校も思考力・判断力・表現力が不足している。この課題を解決していくために、アクティブラーニングを取り入れることが大切だと考えられる。

協働的な学びでは教員の力量も必要であり、生徒が頭をひねって考えなければいけない問題も提示し、グループで協力して課題を解決することによって、思考力・判断力・表現力の向上が期待できる。

このような授業形態を通して、授業を投げ出す生徒が減少し、学力向上になっていく。また、集団づくりや生徒指導面にも効果があり、エスケープや不登校生が減るということも期待できる。アクティブラーニングの活用は必要だと感じている。

<話題提供5 13期生の学力実態について（奥本指導教諭）>

・先ほど話が出ていた件で13期生の学年主任の先生が、夏季課題の現代文で『私のお勧めの一冊』という課題を科した。提出された文章を見ると「こんなに熱い文章が書けるのか」と感心するような内容の出来栄であったが、人前で発表するとなると、まだまだハードルが高く感じられる。

芝井委員

この資料はどのようにフィードバックされているか？

奥本指導教諭

三者面談や志望校検討会議などで有効に利用している。

芝井委員

PTA 総会などで広報すればいいのではないか。

奥本指導教諭

5月6月の学年別の進路指導説明会や学年別懇談会でも伝えている。

浅野委員

文系と理系に差がついているのはどうしてか？

奥本指導教諭

数学が苦手な英語がある程度できる生徒が多い。我々としては理系にも多く生徒が興味を引くように導いているが、理数が苦手意識の生徒が多いように思う。

山本首席

資格志向の生徒が増えていることも一因である。

芝井委員

大学でも中堅どころの学生に資格志向が非常に増えている。

浅野委員

スマートフォンの使用規定などはあるのか？

田中首席

入学式の際に家庭内での使用に関するルールを作るように依頼している。

奥谷教頭

少なくとも槻の木生同士は夜の 10 時以降はお互い使用しないように呼びかけを行った。

<話題提供6 学校保健委員会から見える槻の木生の実態（田中首席）>

<全般的な提言>

浅野委員

ビジネスモデルが本校の強みである。上手く行き過ぎているが、今後足かせになるようなことがないように注意してもらいたい。

北山委員

中学校としては真面目で頑張れる生徒を槻の木に送って行きたいと考えている。

柿原委員

学校に来て懸垂幕を見てすごいなと感じた。藤田教諭が言っていたように「良い子の集まりで、羊たちを狼の中に放り出した時」の対応力をつけた人材育成が必要である。また賢くても表現力・行動力・判断力・気づきがない子が多い。勉強だけでなく生きていく力を身に付けてほしい。チャレンジして欲しい。

木村会長

学校のやれる中で良くやって頂いている。先生方の熱意に支えられている現状である。若い先生方へ継承して欲しい。親もしっかりして欲しいと考えている。

芝井委員

松本校長がいらっしゃる時に保護者に対しての講演で「槻の木は今までの公立の悪い所を変えていこうとする高校で、公立というより私学のようなもの」と話をさせてもらった。そういう雰囲気は是非残して欲しい。良いところは伸ばし、悪いところは改善する姿勢を継承していただきたい。

竹下校長

いいところは伸ばし、改善すべき点は慎重に考えながらも大胆に改革していきたい。今後とも委員の皆様からのご提言をよろしくお願ひしたい。